



ハリネズミとドラえもん

むかしむかし、あるところで、2匹のハリネズミが会ってお友達になりました。

その日はとても寒い日だったので、2匹のハリネズミは、近づいてお互いの体温で温まろうとしました。

しかし、近づくと、相手の体に生えているトゲがささって、痛くてしかたありません。

そこで、あわてて離れてみましたが、それだと寒くて、耐えられそうにありません。

2匹のハリネズミは、近づいては相手のトゲで痛い思いをし、離れては寒さに凍えるということを繰り返していましたが、

お互いに協力し合って、ついに、痛みを我慢出来、お互いのぬくもりで温まれる距離を探し当てました。

その後、2匹のハリネズミは、いつまでも仲良く暮らしました。

これはドイツのシュウベンハウエルという哲学者が作った寓話です。

ハリネズミ君たちは、「傷つきたくない」という気持ちと「相手のぬくもりを感じたい」という両立しない2つの気持ちのために板ばさみになりました。

私たち人間も、誰かと親しくなると、時には甘えたり遠慮がなくなったりして、相手を傷つけたり、逆に傷つけられたりすることがあります。

でも、傷つくのが怖いからと、誰とも親しい関係にならなければ、とてもさびしいもの。

こういったジレンマが、人間関係においては至る所で起きるものです。

大人ですらそうなのですが、関係の作り方について学び始めたばかりの子どもたちは、たくさんの失敗を経験します。

必要以上に近づき過ぎて、同調圧力に苦しんだり。

ちょっとした諍いで、「もう絶交！」などと断絶状態にしてしまったり。

近づき過ぎたり遠ざけ過ぎたりして、いろんな失敗をしながら関係の作り方や紡ぎ方を学んでいきます。

そして、これらはかなり高度な学びです。

近さという痛みが気にならず、しかも相手のぬくもりを感じる心の距離は、人によっても状況によっても違うので、ちょうどいい距離を見つけるのは、とても難しいからです。

でも、お互いが相手を思いやって、協力し合えば、ちょうどいい距離を見つけることが出来れば、いつまでも仲良しでいられることを、ハリネズミくんたちは教えてくれているのだと思います。

寓話ではないのですが、そうした距離感を伝える比喩として私は「ドラえもん」を使うこともあります。

ドラえもんの中で一番好きなキャラクターは何ですか？

隙間時間などで、ふとこのように尋ねてみるのです。

人気が高いのは、毎回やはりドラえもんです。

クラスの9割以上の子が、手を挙げます。

長年大勢の人に愛されている、不動の人気キャラクターです。

その話の中で、きまって「先生は誰が好きなの？」と聞かれるので、次のように答えます。

「先生が好きなのは、ジャイアンです。」

途端に「ええ～～！！」「なんで！？」と子どもたちはどよめきます。

笑顔で次のように話を続けます。

先生の好きなキャラクターは、改めて言いますがジャイアンです。

もう少し詳しく言うと、映画の中のジャイアンが好きなんです。

ここまで話すと、何人もの子が大きく頷きます。

「ああ～～」「わかるわかる！」と。

ジャイアンは、普段は結構意地悪です。

のび太のことをいじめたり、スネ夫のおもちゃを勝手にとったり、何となく悪いイメージのあるキャラクターです。

ところがどうして、映画作品の中では「いいヤツ」なのです。

特にピンチで苦しい時ほど、頼もしいのです。

くじけそうになったのび太を励ましたり、身を挺して仲間を守ったりと、とにかく優しくて強い姿が描かれます。

普段は少し意地悪かもしれませんが、ここその場面で誰よりも友だちに優しいのはジャイアンだと思っています。

だから、私はジャイアンが好きです。

良い面悪い面をひっくるめた、「人間らしさ」が好きなのです。

ちなみに、これは私の子どもの頃のイメージなので、ひょっとしたら子どもたちには伝わらないかもしれないと思っていました。

しかし、毎年どのクラスでもこの話は大変な共感を呼びます。

キャラクターの描かれ方は、一貫して今も続いているようです。

ちなみに、学校という場所は「みんな仲良く」という言葉を使いがちです。

今も、全国多くの学校でこの言葉がスローガンのように語られています。

しかし、この言葉は落とし穴が多いのです。

ですから私は、「みんな仲良くしなさい」という言葉を、教室で言ったことがありません。

「仲良く」の言葉の定義にもよりますが、そもそも「みんな」が「仲良く」という状態は、普通では考えられないことだからです。

78人もの子どもが集まるこの学年。

26人もの子どもたちがいるクラス。

小競り合いがあれば、ぶつかることだってあります。

それが、自然だし普通です。

当たり前のことです。

そして、そういう一つ一つのことを乗り越えていくことには、極めて大きな教育的意義があります。

それを一斉に「みんな仲良くしなさい」と言ってしまう事は、どこか不自然とかひずみを生じさせてしまう一因になると思っています。

だから、「みんな仲良くしなさい」という言葉を使いません。

その代り、「仲間を大切にしなさい」とは言います。

「大切にする」とは、相手を認めることです。

少しくらいぶつかることがあったとしても。

ちょっと仲が悪くなってしまうことがあったとしても。

困った時に助け合えたり、嬉しいことが起きた時は喜び合えるのが「仲間」だと思っています。

まさに、映画の中のジャイアンのような姿です。

縁あってこのクラスに集まった78人が、胸を張ってお互い「仲間」だと言い合える姿を目指しています。

そんな話を、今度どこかでしてみようと思います。

以前も少し書きましたが、「クラス」は、始まりの時点では「チーム」や「仲間」には程遠い状態です。

「集まり」とか「集団」の方が近いでしょう。

チームへと進化を遂げるには、目標がいります。

そして、行動の指針となる哲学がいります。

1年生の集団がチームや仲間へと進化できるように、様々な出来事を避けるのではなく乗り越え、日々を過ごしていきたいと思っています。

ご家庭でも、人間関係の「創り方」や「距離感」などについて、どんなお話をされているのか、教えて頂ければ幸いです。(渡辺道治) [1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)